

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
254
載

虫たちの攻防

昨年はカメムシが大量発生した。ごたぶんに漏れず、我が家でもびっくりするくらいのカメムシの姿を目にした。調べてみると、日本には1000種類以上存在するといふから、もうそれだけでこの小さな虫の奥深さを感じてしまう。

よく見かけるカメムシは鮮やかな緑色の姿でジツとしてることが多く、見た目は何とも可愛らしい。しかし、踏むと強烈な悪臭を放って周囲を辟易とさせ、とんでもない事態を引き起こす。カメムシが発する悪臭は、むろんわが身を守るため。生物ならたいい持っている防御反応の

たぐいだ。みずからが発する臭いで失神してしまふこともあるといわれ、カメムシの体表は厚いセメント層で保護されているのだという。逆に、カメムシの中には群れを作り、低濃度の匂いを集合フェロモンとして利用することももあるらしい。人間でも、微かな汗臭さが一種の色気として好まれるときがあるが、それと似ているのかもしれない。昔から日本全国に生息していることから、それぞれ地方での呼び名がある。「ヘコキムシ」「ガメ」「フウ」「アネコムシ」などが代表的だが、中には「オヒメサマ」（兵庫県）、「ヒメム

シ」（京都）などがあり、緑色の後ろ姿が平安時代の十二単衣にでも見えたのだろうか、ついその起源を知りたくなってしまう。笑えたのは「トモコチャン」（長野県）だ。同名の人はさぞかしからかわれたことだろう。もうひとつ、身近で驚



異的な動物にダニがいる。特にマダニは大変危険な生物で、噛まれると高熱と発疹が続き、重症化したり命を落としたりする。このマダニのメスは、交尾を終えると8本の脚を使って適当な枝までよじ登り、そこで哺乳類が近くに来るのをジツと待

つ。下を哺乳類が通りかかったら、その上にダイビングしてその生き血を吸うのだという。その過程には、驚くべくマダニの生息が潜んでいる。獲物の接近を知るのは、哺乳類の皮膚から発せられる酪酸の匂いを嗅ぎ取る能力があるからだ。ダ

イブに成功したら、着地した部位の温度を感じ取って、なるべく毛の少ない場所に移動し、吸血しやすい皮膚に頭から食い込む。しかも着地点の温度が摂氏37度ピッタリでないとい、移動して吸血しようとはしない。酪酸の匂いを嗅ぐ嗅覚、温度を感じる温度感覚、体毛の少ない部位まで移動する触覚、これらが揃ってはじめてマダニの吸血という行為が成立する。これだけ鋭敏な感覚を持つていたなら、さぞかし哺乳類の血液は好みの味

なのだろうと思いきや、何とマダニには一切味覚はないのだという。木の枝で獲物を待つ時間は、果てしなく長い。逆にいえば、長時間にわたって好機を待つ能力をマダニは備えている。一転して、マダニの一生は切ない。たらふく生血を吸ったあとは、地面に落ちて産卵し、あとは死を待つのみである。ほんの1、2センチの虫たちが、すぐそばで私たち人間とは全く異なる能力を持ち、異なる世界を生きている。仮に「あらゆる生物の中で人間が最も高度な知能を持っている」と言うならば、その知能とはいったい何を意味しているのだろうか。ふと、思う。知能とはもしかしたら煩惱のことではないか、と。逃れようとも逃れられない煩惱こそが、私たちの存在価値を知らしめてくれているのかもしれない。

イラスト・伊藤香澄